

雲・空のはなし

今日は、少し毛色の違う「雲」と「空」の話です。えっ！「雲」や、「空」、白井に独特のものがあるんですか？いいえ、さすがにそれはありません。ただ、私がこの学校に来て、最初に思ったことは、「ああ、空がまっすぐに広いなあ。」ということでした。皆さんは、この風景に慣れてしまっているのか、この白井中の周辺にいかにも広々とした「空」が広がっているか、などと思ったことはないかもしれません。でも、例えば、高層の建物がたくさん立っているような場所では、「空」は切れ切れにしか顔をのぞかせないこともあるのです。育った場所も、住んでいるところも同様に広い「空」をもつ私には、いたって居心地のよい環境です。



さて、ある日のこと。クラスの生徒が窓から見える空をみて、「うろこ雲が見えるよ。」と教えてくれました。言われて外を見てみると、美しい「うろこ雲」。「うろこ雲」は、秋によく見られる「雲」とありますが、上空には常にこのような「雲」は存在するので、秋に突然現れる「雲」というわけでもありません。ただ、「秋」は大気が澄み、より、これらの「雲」が目につくのでしょう。さて、「うろこ雲」の他にも似たような雲があります。「いわし雲」「鯖雲」「ひつじ雲」いずれも似たような様子です。（気になった人は、画像を見てね！）これらの雲が見られると、天気が悪くなる前兆と昔の人は言いました。今ほど気象予報の技術がなかった時代、それでもよく当たった予想だそうです。

古来日本人は、その豊かな自然を大切に、色とりどりの季節とともに暮らしてきました。少し前から今に至るまでひそかなブームとなっている「七十二候」、聞いたことがありますか？そうです。給食室の前、図書で紹介とともに図書館指導員の先生が掲示してくださっている「季節の言葉」、それが「七十二候」です。もともとは、中国で生まれたものですが、日本の自然に合わせて、昔の人々が作り変えました。私たちには、春夏秋冬、と四季折々程度の区別ですが、昔の日本人には、1年を72もの季節の言葉で表す繊細な感覚がありました。それらには全て「身近な自然」が織り込まれています。例えば、「虹蔵不見」（にじかくれてみえず 11/22 辺り）虹を見かけなくなる頃。美しい「虹」に目はとまっても、それが見られなくなる季節の移ろいを、「空」を見上げて読み取っていた先人たちの感性。しみじみ美しいなあ、と思います。図書室にも、わる美しい本があります。何かと忙しく、「空」や、「雲」を見上げることも少なくなっているような気がします。白井中の周りには、今も美しい「空」が、悠然と広がっています。たまには「空」を見上げてみませんか？

